

Not-God

『アルコールリクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第五章 AA成熟への道

1941年－1955年

アルコールリクス・アノニマスの限界

Presented by
なかやま ひいらぎ

1

はじめに

第五章の構成

1. 急速に集積する経験の知恵を、いかに効果的に分かちあうか → **12の伝統**をまとめること
2. 新たな二つの問題に向きあうことになった
 1. **底突き**という考えについての理解を深める必要性
 2. **向精神薬**が社会で広く使われるようになった
3. この原理の一つの側面 (**AAには限界がある**) が共同体に歓迎されていない

2

AAの12の伝統

(3)

メンバー数の増加がもたらしたもの

Not-God/191-192

- ほぼ等比級数的な成長
 - 1941年 アメリカ北東部に2,000人 → 45年 15,000人
 - 戦時下で世界中に散らばったAAメンバーが現地のアルコールクを見つけ始めた
- **ニューヨークのオフィスに宛てられた書簡の数も増えていった**
 - ほとんどの書簡は本の注文や地域のメンバーについての情報
 - 手続きや実践、そしてときおり理論についての質問
 - **これらに答えるのがウィルソンの仕事**

(4)

よくある質問に対する答えとして

- いくつかの質問はよくある質問であることがわかった
- 回答者であるビルが手一杯である。同じ質問が繰り返される
- 規則やルールにすることはできない
- だが、痛みを経験しているグループにとってはガイドとなる
- 創刊したばかりの *AA Grapevine* 1946年4月号
 - Twelve Suggested Points for A.A. Tradition
 - 12の伝統 長文のかたち long form

(5)

二つの問題（底突き・向精神薬）

(6)

二つの大きな問題が解決に向かう

- 底突き「底」を上げる
- アルコール以外の問題をどう扱うか—特に処方薬

(7)

底突き「底」を上げる

- AA最初期：とくにひどい状態で絶望的なケース」ばかり
- 『サタデーブニングポスト』紙の記事で状況が一変
 - 若い人たち、仕事や家庭、健康、そして社会的によい立場をまだ保っているような多くの人たち
- 「底」「降伏」「回心」という概念は残った
- 「底」は上げることができるが、「底を突く」経験の**必要性**は残った

(8)

アルコール以外の問題

- **ほかの問題**の扱いは、解決されるまでおよそ25年かかった
- 処方薬の中にはアルコールと似た効果を持つものがある。
 - →処方薬依存を持っている人も全員AAメンバーに迎え入れるべきではないか？ 処方薬で酷い目に遭ったメンバーもいる
 - アルコホリズムの概念を「物質依存」に拡大し、**AAプログラムをほかの薬物依存に応用する**にはどうすればよいか
- AA自体は伝統に忠実にあり、この動きから距離を保った。

(9)

AA Grapevine 1945年8月号

- ワシントンニアンを終焉に至らせた四つの欠陥
 - 過剰な自己宣伝—**自己顕示**
 - 同じ領域のほかの組織と協力するのではなく**競争**した
 - 目的を『大酒飲みの更生』という本来の確実で単純なことに絞らず、無益な論争と**想定外の目的の追加**で、本来の目的を見失った
 - 本来の目的と、そのためには**誰とも争わない**という決めごとを手放してしまった
- ビルは**一体性** (unity) を、AAの**目的が唯一**であると論じる

(10)

ビル・Wが行った講演 1943-44

Not-God'198

- ジョンズ・ホプキンス大学で開かれたボルチモア市医学会精神神経分科会（メリーランド州精神衛生委員会）
- ニューヨーク州医学会精神神経科部門
“Basic Concepts of Alcoholics Anonymous”
- Yale University’s Summer School of Alcohol Studies
“Fellowship”

AAがまともな治療法として医学界に受け入れられるきっかけとなった

(11)

イエール大学の三つの計画

Not-God'199

- 1944年1月 ジェリネク博士、ハガード博士、ベイコン博士
- **アルコール研究のイエール計画**
Yale Plan for Alcohol Studies
- アルコホリズム治療のための**イエールクリニック計画**
Yale Plan Clinics for the Treatment of Alcoholism
- **全国アルコールリズム教育委員会(NCEA)**
National Committee for Education on Alcoholism

調査研究・治療・公衆教育

(12)

イエールの計画に対するAAの姿勢

Not-God191-192

- 資金には関わらなかったが、研究協力は行った
- マーティ・マンが自らを「**本物のアルコールク**」として提示した（自らAAメンバーだと名乗るのに等しかった）
- 当時は問題飲酒から回復して飲酒をコントロールできるようになったり、酒をやめた人たちは自分を「**元アルコールク (ex-alcoholic)**」と名乗っていた
- AAはマンの活動を「より大きな善のため」とであると受容

(13)

全国アルコールリズム教育委員会

Not-God202-203

- **NCEA**は1946年に公的に資金を募り始めた
 - 寄付依頼書のレターヘッドにウィルソンとスミスの名
 - AAとの関係が示唆されていた
- AAオフィスはビルに宛てて「とんでもないことになる」と電報を打った
- AAのニューヨークの事務所は質問や抗議の電話や電報であふれた

(14)

「AAには限界がある」ことを受容

(15)

AAの不完全性

Not-God204

- ビル・ウィルソンの気づき

「私は突然、自分がどれほど他者を支配しようとしているのかに気がついた。また、無益な自己批難にどれほど浸っていたかも。すべては、何かをあるいは誰かを**コントロール**する方向に揺れ動いていた」

- **AA自体が神ではない**こと・・・AAはひどく不完全な集まりで、それはメンバーがひどく不完全な人びとだから

- 私たちが現代社会を引き裂いている圧力から免れることなど永遠にありえない—**(AAは特別な存在ではない)**

(16)

AAの最終的なしくみ

- 1945年11月1日 理事会に向けて
 - 「私たちは……いま最終的なしくみをつくろうとしている」
 - 「私は手放しつつある」
 - 「私たちが現代社会を引き裂いている圧力から免れることなど永遠にありえないことがはっきりしている」
 - 霊的な影響力を増加させるためには、世俗の力を手放さなければならない、というパラドックスに理事たちは向き合わねばならない

1948年にいったんは頓挫。ボブ・スミスも最初は反対した

(17)

「三つの状態」という理解の浸透

- active alcoholic ・ merely dry ・ true sobriety
- ドライ drank (前章で紹介)
- 三つの状態があるという理解がAAメンバーに浸透していった
- 二つの選択肢
 - 飲まないで生きる (living sober) → AAという生き方
 - アルコホーリック的な考え方・生き方を続ける (thinking and living alcoholically)

(18)

『12のステップと12の伝統』 ①

- 1950年、ビルはAAのリーダーシップから身を引き始めた
- 1953年には『12のステップと12の伝統』
 - 拠り所にしたのは1946年から50年の間の**自身の経験**
 - **12の伝統**を最初から最後まで「**生き方**」として描いた
 - 12の伝統はしばしば「規範」だと捉えられてしまう
 - **謙虚さ** (humility) を強調した **most passive one of readiness, openness**
 - 「私」にできるおもな「活動」はどうみてももっとも**受身的な**、待つ姿勢—
「人間と神との真の触れ合いの始まり」

(19)

『12のステップと12の伝統』 ②

- 強さは弱きからこそ生まれるという根源的な真実を表現した
 - **本能** (instinct) の特質と役割
 - **要求** (demand) にともなう危険の本質
 - **依存** (dependence) と**自立** (independence) という相反する二つの方向性を探究し続けるアルコールクが陥りがちな罠
- 「AAは成功に基礎をおいているのではなく、失敗においているのだ」

(20)

『12のステップと12の伝統』③

- **本能** — security, sex, and society
 - 基本的本能そのものはよいものでも悪いものでもなく、それらは単純に**そこにあるもの**なのだ
- これらの欲求や情熱を歪ませ、誤らせるものは**要求** demand
 - 「私たちは自分にも他人にも、そして神にも、不合理な要求をしていたのだ」 (12&12, 100)
 - 人間は本質的に限界をもつ生き物であるから、どのような要求も最後は欲求不満にいたるよう運命づけられている

(21)

『12のステップと12の伝統』③

- 要求の罨から逃れるために、ウィルソンはシンプルを解決を提案した。**適切な依存**のみが唯一、**本物の自立**である。
 - 適切な依存とは、まず**第一に、神への依存**
 - [次に] ほかの人びとを頼ること
- 本能に正直な生き方から、弱きより生まれる強さを享受できるようにと
- **個人の限界のなかに全体性がある**と受け入れることから本質的に得られる**ありのままの状態**へ → **ヴァルネラビリティ(脆さ)**

(22)

『12のステップと12の伝統』④

Not-God 212

- 精神医学の研究が進むにつれ、**アルコールリズムとアルコールク**の特徴が浮き彫りになった
- それは「**過剰な依存**というかたちをとって表れた**未熟さ**」
- ハリー・ティーボー博士：ソバーであっても、**幼児的で誇大な**「赤ちゃん大王陛下」の要求を満たそうと生きている
- ウィルソンはこの診断を受け入れ、『12のステップと12の伝統』にその理解を組み込んだ

(23)

成熟を目指して

Not-God 191-192

- ウィルソンは、**AAについては未熟**という見解を受け入れるのを拒否し、**成熟を示そうとした**
- 彼にとって、成熟のおもな特徴となるのは、**責任**であった
 1. 飲まない生活を送るアルコールクは、**自分自身についても**、また同様にほかの**まだ飲んでいるアルコールクに対しても責任ある行動**を取るように示そうとした
 2. **AA共同体の構造を作り変えようとした** → ゼネラルサービス評議会

(24)

アルコール財団と理事たち

- 1938年：理事は**ノン・アルコール**である必要があった
- 1945年：「外部からの寄付を受けない」という伝統を採用
 - にもかかわらず、理事会と財団は存在し続けた
 - AAが社会から尊敬されうる存在になったことを**証言する立場**
(彼らはアノニミティの原則に縛られない)
 - しかし、そのような**ノンアルコールへの依存**は、ウィルソンにとっては、責任を拒む、**未熟の証拠**であった

(25)

第三のレガシー(遺産)

- AA Grapevine 1950年12月号「あなたの**第三の遺産** (レガシー) — AAゼネラルサービス**評議会設立**の提案」
 1. ドクター・ボブもビルもいなくなってしまう。
 2. 彼らの友人である理事たちは、AAのなかでは知られていない。
 3. 理事たちは、AA自身からの直接の導きなしには機能できなくなる
 4. AAはその幼児期を抜けた一大人になったいま、その**本部に対し**、あらゆる権限を有し、**直接に責務を担う義務**がある。

(26)

ティーボウ博士の拒否

- ティーボウ博士は激しく批難した：
 - 「おそらく集合的なエゴを増大させるだろう」
 - 「年に一度の集まりは、実際には無駄になるだろう」
- ウィルソンの返信：
 - AAメンバーがいかに「**非人間的な厳しさで外側の世界から規律を求められているか**」
 - かつて米国医学会の二人の独裁的な会長たちを例に挙げ・・・AAメンバーはそのような人たちにはけっして従わないし、受け入れない

(27)

成熟への答えを求めて

- ティーボウとウィルソンのあいだの論争は「成熟」について
- 依存している現実を否定することは、**未熟さ**のほかならぬ証拠
- ビルは続く四年間でその答えを探した：
 - 評議会のテーマ：
 - 1952 「進歩」
 - 1953 「私たちは成熟の入り口に立っている」
 - 1954 「自信と責任」
 - 1955 「成年に達する」

(28)

成年に達する

- 1954年10月 アルコホーリック財団がAAゼネラルサービス理事会に（ただし、理事の過半数はノン・アルコホーリックのまま）
- 1955年7月セントルイスでの20周年コンベンション
 - テーマ『成年に達する』 Coming of Age
 - この大会では三つの主要な出来事があった（次項）

(29)

20周年コンベンション ①

- 大会では三つの大きな出来事があった
 1. AA共同体がその歴史を受け入れ、把握し、そして自ら前進させるという意義を確認した
 2. ビッグブックの改訂版(第二版)が刊行された
 3. AAの三つの遺産（レガシー）——回復、一体性、そしてサービスが、ゼネラルサービス評議会が担うことで、正式にメンバーの手に渡された

(30)

20周年コンベンション ②

成熟の最終的を証しは、両親が与えてくれたもの、両親が与えてくれなかったもの、両親への依存と両親からの自立——これらすべてを認め、受け入れ、そして両親を許すことである。この視点は個人の場合と同様に、団体にも当てはまる。ビル・ウィルソンとAAとは、彼らの歴史を認め受け入れることで、1955年にこれを達成した。

— AACA 344-345
(31)

BB最初の改訂の「主たる目的」

- 個人の物語〔体験談〕を最新のものにすること
 - AAで助かった人たちの広範囲にわたる背景をより適切に描くこと
 - 総じていえば、どん底にいる酔っぱらいたちだけが助けられるというわけではないことを示すことが重要な目的だ

「AAのメンバーの中核、おそらく50%は、かなり裕福な背景をもっている人びとだ……AAの経験からわかっていることは、こうした人々について、**私たちがどこに位置づけるべきか**と思うのではなく、**この人たち自身が自分たちではとのあたり**に位置すると考えているかをもとに扱うべきだ」

(32)

普遍性を主張してはいたが

- ミーティングに普段から参加している人たちのほとんどはアルコールリズムの底を突いた人たち
 - **上から下へ落ちていく方向**、とくに上層中流階級の子どもたちで親世代の価値観（あるいは幸運）をうまく取り入れられなかった人たちの苦しみ
 - **下から上をめざす**努力の過程での不満、**中流層の底辺**にいる人たちの苦悩
 - 1955年のAAには「どん底の酔っ払い」は多くない

上層中流階級から落ちていく層から、中流階級の下から上昇する層へと、AAの一般的なメンバー構成は移っていた

(33)

普遍的というには成熟が足りない

- とても金持ちである人も、とても貧しい人も・・・長続きしなかった
- AAは**中流階級が主体の白人の現象**
- AAで活発に活動するメンバーたちは**中流階級**で、さらにいえばその背景が人口の**中間値**や**大多数の状況よりも上**であるような人たちに偏っていた

金持ちも貧乏人も長続きしない・・・**中流層主体（中央値の少し上）**

(34)

まとめ①

- 1955年にA Aが宣言した「**成熟**」のおもな基礎は築かれた。
- A A共同体が「回復、一体性、そしてサービスという三つの遺産」という責任を受け入れ、間接選挙を経たゼネラルサービス常任理事会というかたちで**ウィルソンからの責任の移譲**は重要な留保をつけて達成された。
- 〔その留保とは〕「成年に達したが……〔この〕表現は私たちが成長を完了したという意味ではない。なぜなら、永遠ではないにしても、**成長の過程は一生続くものだからだ**」

(35)

まとめ②

- ウィルソンの役割……「ピンチのときには助ける」けれども「継続して活動することはもうしないし、A Aが自分で自分を傷つけないように何かをすることももうない」と決めた。
- 一つの結論に達した：「〔A A自身がA Aを傷つけるようとしても〕常任理事会はとめないだろうし、彼らにはとめることができない。神をたたえよう」

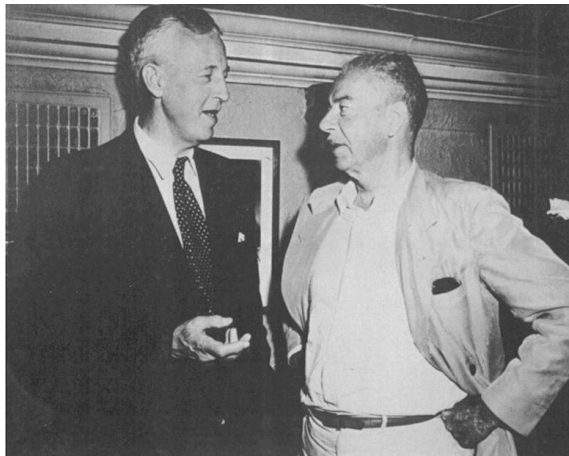
(36)

まとめ③

神でないこと〔という限界〕の受容から、その限界を全体性を生み出す源として大切に受け入れるにいたることは、AAにとって難しいことだったし、とくに常任理事たちにとっては難しかった。なぜなら、この常任理事たちは、それぞれAAメンバーでもあったからだ。神でない〔有限である〕こと、自分が神ならざる存在であるということは、簡単に学びうる概念ではなかった。しかし、まさに**限界ある存在であるからこそ、その限界ゆえにAAが全体性を得られる**ということを確認するのは、AA共同体にとってもプログラムにとっても欠かせないことであった。ウィルソンが一九五五年以降、そこに注意と努力を戦略的に向けた

(37)

ご静聴、ありがとうございました。



from *Back to Basics – AA Beginners Meeting*